

真理のデフレ論者としてのラムジー

槇原 千尋

0. 序

真理は、私たちの信念や探究の規範であるとされる。つまり、私たちがある考えをもち、主張し、議論し、批判するときには、それらが真であることをめざすのが合理的な態度だとされる。このような「規範としての真理」という考えは、ラムジーが1926年の論文「真理と確率」において、帰納的推論を「真理の論理」と呼ぶときの含意のひとつである。

私たちはみな、帰納的論証に確信をもっている。そして私たちのこの確信が合理的なのは、帰納的推論を全体として真なる意見へと導くように世界が構成されているからである。私たちはそれゆえ、帰納法を信頼せざるをえないし、仮にそれを信頼しないことができたとしても、なぜそうすべきかは不明である。なぜなら私たちはそれを信頼できるプロセスだと知っているからだ。(TP p. 93)

事実上、真理への信頼できるプロセスになっているという点において、私たちは帰納法を信頼すべきなのだ、というわけである。それゆえラムジーの認識論上の主張は、この「規範としての真理」という一般的理解を許容しうるものでなければならない。

ところが、ラムジーの真理論は通常、「真理は余剰な概念であり空虚である」とする真理の余剰説 (redundancy theory of truth) とみなされる。この立場のもとでは、真理は、規範的であるどころか、そもそもいかなる「本物の」概念ですらない。つまり、真理とは、伝統的な分析があたえてきた、世界とのかかわりにおける定義 (対応による定義) や、私たちの信念とのかかわりにおける定義 (信念の整合性やプラグマティズムによる定義) によっては分析される、存在論的・認識論的な概念ではないとされるのである。上に見られたように、私たちが真理を認識論的な規範とみなしているというのがラムジーの見解なのだから、こういった規範性の実質的内容が、ラムジーの真理論によって説明されるのを期待することは自然であろう。にもかかわらず、その真理論においてラムジーが上の余剰説を採るなら、私たちは、真理がもつとされた規範性の説明を、実質的に彼にもとめる方途を失ってしまうように思われる。この状況を私たちはいかに理解すればよいのだろうか。

本論の目的は、このような「認識の規範としての真理」と「非認識論的・非存在論的な概念としての真理」という二つの考えをともに整合的にラムジーに帰するための枠組みを

設けることである。本論の主張はこうである。第一に、ラムジーが収縮的な真理の理解、いわゆる「真理のデフレ論」的な理解を受容していたことを認める点で、先の余剰説的な理解は正しい方向を向いている。ただしそのような理解の方針は幾分修正を必要としており、この適切な修正を、本論は、標準的な解釈とその代替解釈の検討を通じて明らかにしようとする（1節・2節）。第二に、このような真理のデフレ論的な描像のもとで、真理がもつとされる規範性の実質的内容の由来は、真理とは独立の起源をもち、真理論を前提としない信念内容についてのラムジーの理論・表象についてのプラグマティックな理論にもとめられるべきである。このことを本論は、ラムジーの真理論と信念論との関係を、彼のテキストに基づいて考察することを通じて明らかにしようとする（3節・4節）。

1. ラムジーの真理論の消去主義的解釈と対応説解釈

1.1 消去主義的解釈

標準的にラムジーの真理論は、「pということ（あるいはpという信念・判断）は真である」と「p」との同値性（以下この同値を（T）と呼ぶ）を次のように理解するものとされる（cf. Kirkham, 1992, p. 317., Horwich, 1998, pp. 121-2）。

- ・ 「pということは真である」と「p」は同じ意味をもつ。
- ・ それゆえ真理述語はそれ自体としては意味をもたない余計な概念である。
- ・ 真理述語はいかなる性質も表現しておらず、真理は性質ではない。

このような解釈のもとでラムジーは、真理概念の本性を極力切り詰めた「薄い」ものとして理解しようとする立場、つまり「真理のデフレ論」と呼ばれる一般的立場のなかでも、とりわけラディカルな形式をとるものとみなされている（Horwich, 1998, pp. 38-40）。

ラムジー自身の見解は、「事実と命題」における次のような主張において、この標準的解釈に最も近づく⁽¹⁾。判断（信念）に帰される性質としての真理について、ラムジーは、その判断に直接真理を帰属するケースと、「彼はいつも正しい」のような暗黙的な判断に真理を帰属するケースを考察している。前者について彼は（T）が真理概念の分析であることを主張し、後者については、（T）と置換量化をもちいて次のように分析する。まず、「彼はいつも正しい」は「すべてのpについて、もし彼がpということを主張するなら、pということは真である」という全称文に自然に置き換えられるだろう。この最後の「pということは真である」の現れは（T）によって「p」と同値であるので、文全体は「すべてのpについて、もし彼がpということを主張するなら、p」となる。この文は、量化が通常の対象量化として解釈されれば、まともな文ではない。しかしながらラムジーは、ここでの最後の「p」が文構造をもつことに着目し、文の名前の領域にかかる量化（置換量化）

としてこの量化を解釈することで、次のように主張する。

[「p」]として考察される命題の形式が aRb のみである場合]「彼はいつも正しい」は「すべてのa、R、bについて、彼が aRb を主張するなら、 aRb 」と表現しうるだろう。これに「真である」を加えるのは明らかに余計である。すべての形式の命題が問題とされる場合、分析はより複雑になるだろうが、本質的な違いはない。そして明らかなのは、ここでの問題が真理と虚偽の本性にかかわるのではなく、判断や主張の本性にかかわるのだということである。というのも、上の定式化において分析が困難なのは、「彼が aRb を主張する」という部分だからである。(FP p. 39, []内筆者補、以下同様)

つまり、真理述語をもちいる文は、置換量化と (T) によって、真理述語を用いない形に分析可能だ、というのがラムジーの主張である。

だが、ここにおいてすら先の消去主義的解釈は強すぎるのがわかる。というのも、ここでの主張は、「判断の分析のために真理の分析が寄与することはない」ということであって、「真理がそれ自体として余剰である」ということではないからである。上に述べられる仕方では真理述語が置換量化および (T) によって消去可能であるということは、たとえそれが正しいとしても、それ自身としては、「彼はいつも正しい」という主張における真理（正しさ）概念の、何らかの機能や役割を排除するものではない。もちろんそういう機能・役割がラムジー自身の認めるところのものであるかは、上の引用から窺うことはできない。しかしこの両立可能性は、標準的解釈への一步を踏みとどまらせるのに十分である⁽²⁾。

したがって、ラムジーの真理論における真理の「余剰性」には、標準解釈が述べるような「真理は余分でありそれゆえ空虚な概念だ」という含意はない。このことは、ラムジーの真理論の消去主義的解釈に、一定の修正の余地をのこす。

1.2 対応説解釈

では、消去主義的解釈のありうる修正とはどのようなものであろうか。この修正の極端な方針としては、私たちが後にみるフィールドの対応説解釈(Field, 1986, p. 60, cf. Field, 1994, Morvan, 2004)がある。これは、「真理が本質的に空虚だ」という消去主義的解釈から、「真理の本性は、対応という存在論的に実質のある「厚い」性質に存する」という見解への極端なゆり戻しである。フィールドがこれを主張する根拠は、ラムジーが第一に信念の精神的要素と客観的要素のある種の対応によって表象の意味論をあたえており、第二に意味のある種の真理条件と認めているという点にもとめられる。

明らかにデフレ論的でない見解のひとつはラムジーのものである。ラムジーは対応論者の明らかな事例である。確かにラムジーは、語「真」が対応的な概念を表現しているとは思っていない。…しかしラムジーは…「発話および思考状態が真であるとは何かという」真理の問題がそれゆえに瑣末になってしまうとは思っていない。本当の問題は、発話や思考状態が、…真理条件をもつことにかかわるのである (Field, 1986, p. 60)。

フィールドはこの根拠に基づいて、ラムジーを、フレーゲ-初期ウィトゲンシュタインの真理対応説と並列する (cf. Field, 1994, p. 104)。この解釈の妥当性の検討はラムジー自身の表象理論を後に (3 節で) 確認する際におこなわれるが、それにもかかわらず明らかなのは、このような主張がラムジー自身の次のような主張と折り合いが悪いということである。

[aRb という] 判断について私たちは、望みとあれば、それが真であるのは a か b にたいして R をもつという対応する事実が存在するときであると語ることが出来る。しかしこのことは本質的に分析ではなく、婉曲表現 (periphrasis) である。というのも「a か b にたいして R をもつという事実が存在する」とは「a か b にたいして R をもつ」ということとといかなる違いもないからである。(FP p. 39)

つまり、ラムジー自身の理解によれば、対応は真理の分析にとって本質的な部分でない。また、同様のことは対応説以外の「厚い」本性を真理にあたえる立場、つまり整合説・プラグマティズム・検証主義などの「インフレ論」にもあてはまる (cf. OT p. 85f.)

以上より、ラムジーの真理論に、消去主義解釈をあたえることも、対応説解釈 (インフレ解釈) をあたえることも適切には見えない。この事態に対して本論があたえたい解釈は以下のものである。確かに、真理は標準的解釈の主張するような「薄い」概念としてラムジーに理解されているが、それは上の消去主義的なラディカルな概念としてではなく、より穏健な形でのデフレ論的な概念としてである。また、この非消去主義を採用する際に、対応その他による本性にまでラムジーの真理概念をインフレさせる必要はない。フィールドが真理対応説を見出すラムジーの真理論と信念論は、あくまでそのようなインフレ論と対立する意味でのデフレ論と両立可能な主張として整合的に理解可能である。

2. 真理のデフレ理論

上の方針のもとでのラムジーは、消去主義的解釈および対応説解釈といかなるしかたで異なり、それゆえいかなる意味で消去主義とは区別される意味でのデフレ論者であるのか。

これを見るために、あらかじめそのような「より穏健な形でのデフレ論」が本論においてどのような立場として特徴付けられるのかを示しておこう。それゆえしばらくの間ラムジーから離れて、この立場の一般的枠組みをみることにし、その後でそういった枠組みのもとで、非消去主義的デフレ論者としてのラムジーに要請される主張を取り出す。

先に触れたように、真理のデフレ論とは一般に、真理が形而上学的・認識論的に特徴付けられるような本性を持たない概念であるという主張である。この主張は今日もっとも有力なデフレ論者たちに次のように理解されている (Horwich, 1998., Field, 1986, 1994.)。

- (1) (T) にしめされる推論 —— 「p」から「pということは真である」を導くことと「p
 ということは真である」から「p」を導くこと (それゆえ (T) 「pということは真である iff p」の諸事例) —— を受容する私たちの傾向性が、真理述語の意味を決める。
- (2) 真理の本性は(1)だけで尽くされている (したがって対応や整合、有用性といった概念をその本性の解明のために必要としない)。

(1)(2)においてデフレ論者は、真理述語が言語のなかでも役割を主張し、かつそのみを真理という性質の本性として認めるという見解をとっている。これは「より穏健な形でのデフレ論」が先の強いバージョンの消去主義と一線を画する点である。消去主義によれば、「真である」という述語は固有の意味をもたない述語であり、それゆえ真理はいかなる存在者のもつ性質でもなかった。この場合、「pということは真である」は「p」の事例の数だけ多くの意味をもつことになるが、こういった諸事例に共通する性質を真理述語が表現することはない。これにたいして上の意味でのデフレ論は、真理述語の使用の傾向性がその述語の意味を確定するものとみなす。「pということは真である」の諸事例において、「真である」という述語が表現するのは、その諸事例に共通のある構文論的な性質であり、使用の傾向性がそういった性質を意味としてあたえるというわけである。この場合、真理述語は、非認識論的・非存在論的な性質を表現するものとして理解されるものの、言語においてそれ固有の意味をもつ。

さて、このように理解される見解の下で、先の消去主義的解釈は、確かに、ラムジーを「真理の唯一の理解は (T) によって示される」という見解にコミットさせる点で、彼にデフレ論的な側面を見出してはいる。しかし、今日のデフレ論者にとってすら消去主義が強すぎるのは、その「真理がいかなる性質でもない」という主張のゆえにである。これに対してデフレ論の(1)(2)によってラムジーを理解することは、真理述語を本来的な述語とみなしつつ、推論的性質をその述語に認めていることをラムジーに要請する。さらに、ラムジーの真理論が信念論との関係として「判断の分析のために真理の分析が寄与することはない」ということを要請していたことを考慮すれば、この要請がデフレ論的主張と整合的

であることが、デフレ論者としてラムジーを解釈する試金石となる。

他方、対応説解釈との対比のうで認められるべきなのは、ラムジーがデフレ論者であるとすれば、真理概念を対応その他のインフレ論によって把握することを真理の基底的本性の把握として捉えていないことが示される必要がある、ということである。それゆえ、特にデフレ論が消去主義および対応説（およびその他の「インフレ論」）の両者から区別されるのは、前者が後者とは対照的に、真理を存在論的・認識論的な負荷を持たない性質として特定する必要がある、という点にもとめることができる。

3. ラムジーの真理論と信念論

真理の本性と真理の基準

ラムジーが以上のような要請をみたす真理論を意図していたことは、「事実と命題」とほぼ同じ時期（1927-8と推定される）に執筆された遺稿『真理について（*On Truth*）』をあわせて理解することで示されうる。そこにおいてラムジーは、真理にかかわる問題として次の二つを区別して考えている（cf. OT p. 6）。

(1) 真理とは何か（what is truth）という問題、つまり真理の本性の問題

(2) 何が真であるのか（what is true）という問題

第二の問題にたいする答えは、実際に真であるものをすべて枚挙するか、さもなくばそれらを特定する方法、言い換えると「真理の基準（criteria of truth）」を示すことによってあたえられるものとされる。これは言い換えれば、個別の文がもつ真理条件の特定を意味する。これに対して、第一の問題にたいする答えは、「真理述語の意味」を特定することによってあたえられるものとされる。

この第一の問題への解答は、私たちがすでに見た、デフレ論の（1）の述べる、（T）の示す真理述語の推論的役割によって説明されている。

ある人が地球は丸いと信じているとせよ。そのとき彼の信念は地球が実際に丸いがゆえに真である。もしくはこれを一般化すれば、もし彼がAはBであると信じているとすればAが実際にBならば彼の信念は真であるだろうし、さもなくば偽であろう。／私にはこの最後の文において真理の意味が説明されたのは明らかだと思われる（OT p. 9）

[真理の]完全な定義というものが何であれ、それは真理と[命題的]指示の明らかな関係を保存するものでなければならない。つまり、ある信念「pということ」が真であるのはpときそのときに限る、というのがその関係である。私たちはこのことをトリヴィアルな形式主義とあざけるかもしれない。しかし不合理なくそれと矛盾しえない

がゆえに、その形式主義は、この明白な贅言と折り合わねばならないより深い[内容に関する]探究についてのささやかなチェックをあたえてくれるのである。(OT p. 14)

つまり、もしある信念の内容がpであることが与えられれば、それについて (T) がなりたつということが真理述語の意味を決定しており、すべての信念について、こういった真理の推論的性質が成り立たないことはありえない、というのがこれらの主張である。それゆえラムジーによれば、信念の真理について「すべての信念xについて必然的に、「もしxがpを意味するならばxが真であるのはpときそのときに限る」ということがなりたつ」
($\forall x: \Box (x \text{ が } p \text{ を意味する} \Rightarrow x \text{ は真である iff } p)$)といえることになる (cf. Loar, 1980)。つまり、真理とは、ある内容をもつ信念に帰属される性質であり、かつその信念について (T) がなりたつということによって規定される性質である。

さて、このような信念の真理についての理解の明らかな含意は、もしある信念の内容が確定されれば、その信念がいかなる真理条件をもつのかも確定されることをラムジーがみとめているということである。言い換えれば、ある心的状態の真理条件が実際何であるかの特定は、その心的状態の表象内容がどのようなものとして特定されるかにかかっている。

3.2 プラグマティズム

真理についての第二の問題である、「何が真であるのか」がかかわるのはこの地点である。これについてのラムジーの洞察は、この問題に解答をあたえる真理の基準もしくは真理条件を特定するための理論が、真理の本性にかかわる第一の問題への解答とはまったく独立に、心的状態の表象理論、つまりいかにして信念の内容が確定されるかについての理論によってあたえられるということである。したがって、真理の基準にかかわる問題は、実は真理の本性にかかわる問題ではなく、それゆえ (T) の示す推論的役割によって示される真理述語の意味の問題ともかかわらない、というのがラムジーの見解である (cf. OT p. 89f.)。

このことは、ラムジーが穏健なデフレ論者であるとすれば、そうあるべきことが要請される事柄でもある。注意すべきなのは、「表象についての理論が与えられれば (T) によって信念の真理条件を特定できる」という主張が、真理の理論と独立に表象理論があたえられる場合には、デフレ論と完全に整合的であって、デフレ論者に認められないのは、その主張にとって循環であるこの逆、「(T) によってあたえられる真理条件が実質的に表象理論をあたえる」だけであるということである。

ではこの要請を満たす表象内容の理論としてラムジーはいかなる理論をもっているのだ

ろうか。これまでに見たように、ラムジーの真理論においては、真理は信念・判断といった心的状態に対して帰属される性質である。こういった心的状態は、「ある信念[または判断]は必然的に、あれやこれやがかくかくであるという信念[または判断]である」(OT p. 8f.)という「命題的指示 (propositional reference)」をおこなうものとされる。ラムジーによれば、この心的状態の精神的要素と客観的要素との間になりたつある種の対応関係⁽³⁾が、両者の間に成り立つ表象関係を規定している (FP p. 34f.)。言い換えると、x という信念が p という内容をもつのは、x が p を命題的指示する (x が p についてのものである) ときである。しかしこの対応関係はいかなるものであり、信念がこの対応関係によって表象内容をもつことはいかにして明らかになるのだろうか。

ラムジーはここでプラグマティズムに訴える。つまり、信念の精神的要素と客観的要素との間にある「命題的指示」という意味論的關係と、ある信念にもとづく結果としてのある行為とのあいだになりたつ傾向性には、ある種の(正の)相関が存在し、この相関が命題的指示を確定する指標となるだろう。「私がプラグマティズムの本質とみなすものはこうである。つまり、文の意味は、それを主張することが導くはずの行為を指示することによって定義されるべきであり、よりあいまいな言い方になるが、その可能な原因と結果を指示することによって定義されるべきである、と。」(FP p. 51)。こういった内容についての理論の概略は次のように述べられる。

たとえば、鶏はある種の毛虫が有毒であると信じている、と語り、そのことによって単に、毛虫と結びついた不快な経験に基づいて毛虫を食べるのをさける、ということの意味することが可能である。そういった信念における精神的要素とは、何らかのしかたでその種の毛虫や有毒性といった客観的要素に関係しているような、鶏の行動の部分であろう。この関係の正確な分析は非常に困難であろうが、しかしこの種の信念に関しては、プラグマティズムの見解が正しかったのだということはあるようなことである。それによれば、鶏の信念と客観的要素との関係とは、毛虫が実際に有毒であるときそのときに限ってその行為が有用となるような関係のことである。それゆえ、その有用性のために p ということが必要十分条件であるような行為の任意の集合は、p という信念と呼ばれるだろう。すると、それが真であるのは、p ときであり、つまり行為が有用であるときであろう。(FP pp. 39-40)

ここでラムジーが提案しているのは、「行為主体はその欲求をもっとも充足するように思われるしかた（つまりその行為が最も成功的であろうしかた）で行為し、それゆえある行為

主体の行為は、その欲求と信念によって決定される」という「心理学理論」が「有効な近似」になる、という考えである (TP p. 69)。

ラムジー自身が認めているように、以上のような表象理論は概略的なものであり、その適切な定式化をめぐることは今日なお係争中である⁽⁴⁾。しかし、デフレ論者としてラムジーを解釈するという私たちの目的にとって重要なことは、この理論は少なくとも、それが表象関係を因果関係のような非意味論的な関係によってあたえる限り、真理条件への実質的なコミットなしに表象内容を確定することを目指しているということであり、それゆえこのラムジーの方針がデフレ論と整合的な調整になっている、ということである。

3.3 真理論と信念論の関係

以上に見られたように、ラムジーは、「真理とは何か」という問題には真理述語の意味を (T) の示す推論的役割によってあたえることで答え、また「何が真であるのか」という問題には、真理概念を前提としない信念内容の特定を、欲求と行為の因果関係によって特定するプラグマティズムによってあたえることで、「真理の基準」を非真理論的にあたえるための一般理論を提示した。この含意を明らかにするため、二つの関連事項を検討しよう。

第一に、上のラムジーの表象理論は、今日では一般に成功意味論 (success semantics) もしくはラムジー原理 (Ramsey's principle) として解釈される。(cf. Whyte, 1990, Dokic & Engel, 2005)。

(RP) ある信念 p が真である iff p を動機付ける欲求に基づく行為が、その欲求を充足する (p に基づく行為が成功する)

このラムジー原理は、真理のプラグマティズム理論のバージョンとみなすことが可能であろう。というのも、(RP) は、信念の真理条件を行為の成功条件によってあたえているからである。するとこれがもし真理の本性にかかわる理論であったとすれば、真理のデフレ論と両立不可能である。というのも、一方で真理のデフレ論にとって真理概念は (T) によって示される論理的役割のみをその本性としてもつような概念であるが、他方で (RP) を認めることは、真理に実質的な本性を持たせることを意味しうるのであり、これらは両立不可能だからである。このことは、(RP) を次の二つの同値文とみなすことではっきりするだろう。まずラムジーの真理論は (T) 「 p という信念が真である iff p 」をもっている。さらにラムジーのプラグマティズムは、ラムジー原理が成り立つ場合、 p という信念に基づく行為の成功が、信念内容である p を真理条件として確定するという理論であり、それゆえ (B) 「 p という信念に基づく行為が成功する iff p 」を含意している。このようにラムジー原理によれば、真理と有用性は共外延的であるとされる。さらにこのことは、

意味を真理条件を用いて定義しているようにも見える。これはデフレ論者としてのラムジーにふさわしくない。というのも、もし真理が意味にとって本質的な役割を果たすならば、真理概念は信念内容をあたえるという認識論的負荷をもつことになるからである。

しかしラムジーにおいて (B) は成り立たない。というのも、彼が行為の成功と命題的指示の確定とのあいだにみとめる関係は、同値性ではなくせいぜい相関だからである。

私たちは精神の習慣を、それがうまく作用するかどうかで評価する。つまり、それが導く諸々の意見が、おおむね真であるか、もしくは別の習慣よりもしばしば真なる信念に導くかによって評価する。(TP p. 94、強調引用者)

それゆえこの場合、真理と有用性は共外延的ではなく、プラグマティズムは真理の本性にはかかわらない。ラムジーにおいてプラグマティズムは、表象内容の理論としてのみ有用であって、これを真理の理論に転用することは端的に誤りとみなされる (OT p. 91) ⁽⁵⁾。

第二に、以上のような観点から私たちは、対応理論的真理論としての解釈の可能性も、(T) の示すデフレ論的真理概念プラスそれとは独立の表象理論によって理解可能であることがわかる。1節で見たようにフィールドは、ラムジーの真理論を、デフレ理論と対立する対応説として解釈した。彼はそこでの引用に続けて次のように述べる。

ラムジーの見解では「真なる命題を表現する」ということは明らかに対応概念である (つまりデフレ論的概念でない)。このことは、ある思考状態がシーザーはルビコン川をわたったという命題を表現するとは何かについてラムジーがあたえる説明から明らかである。そのようなある思考状態は、「発声されたり内語されたり、単に想像されたりした語」とみなされるような「心的要素」を持たねばならない… [中略] …明らかなのは、心的な記号がある対象やある関係の代わりをするとは何かについてのある種の自然主義的な解明が適切だとラムジーが考えていたということである。この見解において、「真なる命題を表現すること」は引用解除的真理のように振舞うことなどまったくなく、最小限のリソースを用いてそれ [引用解除的真理] から定義可能な概念のように振舞うこともないのである。(Field, 1986, p. 60)

ここでフィールドは、ラムジーが、ある信念の表象の問題を、「真理の問題」の理解に構成的なものとみなしていると考えている。そしてこれ自体は正しい指摘である。というのも、すでに私たちが見たように、ある心的状態の真理条件が現実は何であるかの特定は、その

心的状態の表象内容がどのようなものとして特定されるかにかかっていることをラムジー自身認めているからである。しかしフィールドは、ここから導く結論「ラムジーはデフレ論者と対立する」において誤っている。この理解が（2節の）フィールドの意味でのデフレ論と両立不可能なのは、ラムジーが表象の問題を、(T)を前提した上で構成しているときに限る。そしてそれを前提しない場合には、まず表象の理論が真理とは独立にあたえられ、次にその表象の理論を前提した上で(T)によって真理条件を特定するということが可能である。この場合、真理の本性にとって必要なのは、(T)の示す推論的役割のみである。確かにラムジーは、フィールドも指摘するように、表象内容の確定についての「ある種の自然主義的な解明」が適切だと考えていた。これはすでに見た表象についてのプラグマティズムにあたる。しかしこのことから直接、フィールドがそう考えたように、ラムジーが真理についての非デフレ論的説明をあたえていることが帰結されるわけではない。逆にこのことは、ラムジーが「真理の問題」として「真理の本性」にかかわる問題と「真理の基準」にかかわる問題を分けていたこと、またそういった「自然主義的な解明」が答えをあたえる真理の基準の問題が真理の本性とは独立の表象の問題に還元可能であったことを考慮にいれば、彼のデフレ論的な側面の現れといえるのである。

4. 結論

私たちが見てきたように、ラムジーの真理論の主張は「真理が余剰である」という見解よりもむしろ、「真理の分析は判断の分析に寄与しない」という主張と整合的であるようなより穏健なデフレ論的見解として理解可能である。ここで結論として、以上のことが本論の冒頭でみた「規範としての真理」にどうかかわることになるのかを述べておきたい。

これまでに見たように、ラムジーは真理の問題の下位区分として、真理の本性に関するデフレ論的主張と、真理の基準に関する（非真理論的な）表象理論をもつ。私たちが先に見た規範性の問題とは、デフレ論の保守性の要請から明らかに、この後者にかかわる問題として理解されるべきであり、(ラムジーの言う)十全な信念・(パース流の)「信念の固定」に至ることが、いかにして私たちの探求の目標となるのかの問題である。あるいは逆に、そういった「信念の固定」に至ることの規範性を、(T)の示す推論的性質に基づいて「真理の規範性」としてトリヴィアルに主張できる（ホーウィッチはこれを「規範的移入（normative import）」と呼ぶ）ということが、ラムジーにおける真理の規範性の理解である。それゆえ、ラムジーの表象理論がある種のプラグマティズム、もしくは自然主義であったことを考慮に入れば、そういった規範性の実質的な内容の解明も、このプラグマティックな（もしくは自然主義的な）ものとなるだろう。

註

- (1) 最も初期の「余剰説」的な主張は、彼による 1923 年の『論考』の書評まで遡ることができるが、もっともよく引用され、カーカム自身も念頭においているのは、「事実と命題」におけるこの箇所である。
- (2) こういった指摘については、Sahlin(1990), Mellor(1981), Loar(1981)などを参照。
- (3) ラムジーが提案するのは、単一の状態としての x という要素と単一の命題という要素の間になりたつ二項関係ではなく、これらの要素のおのおのを構成する、対象たちと関係たち同士の間になりたつ多項関係である (FP 参照)。多項関係理論における信念帰属の論理形式の詳細については Loar(1981)を参照。
- (4) たとえば Dokic & Engel(2005)や、Whyte(1990)に触発された一連の論争を参照。
- (5) ラムジーはそのような「真理のプラグマティスト」としてジェイムズを挙げ、パースのプラグマティズムの曲解であるとみなした。

文献 (ラムジーの文献については、年号右に添えた略号により本文中に引用箇所を示した。)

- Ramsey, F.P. (1927) (FP). 'Facts and Propositions', in Mellor, D. H. (Ed) (1990, pp. 34-51).
———— (1926) (TP). 'Truth and Probability', in Mellor, D. H. (Ed.) (1990, pp. 52-94).
———— (1991) (OT). *On Truth: Original Manuscript*, Rescher, N & Majer, U. (Eds.), Kluwer Academic Press.
Dokic, J. & Engel, P. (2005). 'Ramsey's Principle Re-situated', in Lillehammer, H. & Mellor, D. (Eds.), *Ramsey's Legacy* (pp. 8-21), Oxford Clarendon Press.
Field, H. (1986). 'Deflationary Conception of Truth', in Macdonald, G. & Wright, C. (Eds.), *Fact, Science and Morality; Essays on A. J. Ayer's Language, Truth and Logic* (pp. 55-118), Basil Blackwell.
———— (1994). 'Deflationist Views of Meaning and Content', *Mind* 103, 249-85.
Horwich, P. (1998). *Truth* (2nd edition.), Oxford University Press.
Kirkham, R. L. (1992). *Theories of Truth*, Cambridge, Mass: MIT Press.
Loar, B. (1980). 'Ramsey's theory of belief and truth', in D. H. Mellor (Ed.), *Prospects for pragmatism; essays in memory of F.P. Ramsey* (pp. 49-70), Cambridge University Press.
Mellor, D. H. (1980). 'Introduction', in D. H. Mellor (Ed.), *Prospects for pragmatism; essays in memory of F.P. Ramsey* (pp. ix-xiii), Cambridge University Press.
———— (Ed.) (1990). *F.P. Ramsey: Philosophical Papers*, Cambridge University Press.
Morvan, P. L. (2004). 'Ramsey on Truth and Truth on Ramsey', *British Journal for the History of Philosophy*, 12(4), 705-718.
Sahlin, N. E. (1990). *The Philosophy of F. P. Ramsey*, Cambridge University Press.
Whyte, J. T. (1990). 'Success Semantics', *Analysis* 50. 3, 149-157.

[哲学博士課程]